

インクルーシブ教育実現に向けた個別の指導計画作成に関わる実践的協働モデルの構築

池田 彩乃(筑波大学大学院人間総合科学研究科/筑波大学附属桐が丘特別支援学校)

I. 問題の所在と目的

個別の指導計画は、個々の教育的ニーズから指導目標や指導内容・方法、配慮事項を決定する個に応じた指導の計画であり、通常学級に在籍しながら、一人ひとりの教育的ニーズを実現するための不可欠なツールである。個別の指導計画は、学級担任が主体的に作成し、自身の授業や指導に役立つツールであることが望ましいが、多忙な通常学級の学級担任(以下、学級担任)に強いる形では持続していかない。学級担任がなるべく負担感や抵抗感を抱かない形での個別の指導計画のあり方を考える必要がある。そこで本研究では、個別の指導計画に関して専門的知識を持った特別支援学校教師との協働に基づいた小学校通常学級における個別の指導計画作成について、事例的に取り上げ検証した。

II. 方法

1. 対象教師：肢体不自由児が在籍する公立小学校学級担任1名および同校に対して地域支援を行っている特別支援学校地域支援担当教師1名を対象とした。
2. 対象児童：脳性まひによる下肢運動障害を有する小学校1年(調査当時)男児で、普段の移動は独歩(クラッチ使用)である。普段の学校生活では介助員はついておらず、介助が必要な階段の昇り降り等には学級担任、保護者または特別支援学級を担当する補助員があたっている。
3. 手続き
 - 3-1. 予備調査：対象児童の様子見学、対象教師のプロフィール、学校の作成の現状や先生の希望等の面接調査
 - 3-2. 本調査：児童の課題についてまとめた実態関連図の作成、個別の指導計画の作成、対象教師への面接調査。

III. 結果

1. 個別の指導計画について(予備調査)

- ・これまでの作成有無：無し
- ・学校としての様式有無：有り

2. 実態関連図の作成(本調査)

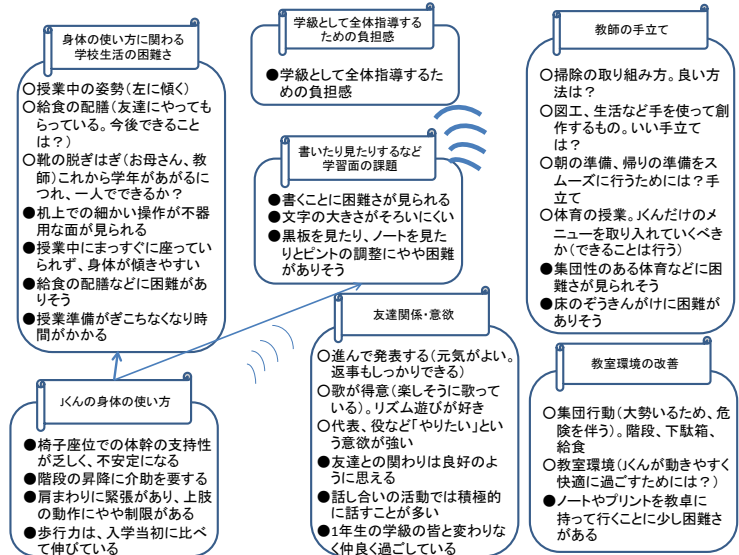
完成した実態関連図を右図で示す。

3. 個別の指導計画の作成(本調査)

実態関連図を基に、今後の指導の方向性について個別の指導計画を作成した。一部分を示す。

<児童の指導の方向性：()内は、指導する担当者や場所>

- ・書く質を高めていく(学習、授業の中)
- ・身の回りの日常生活動作を身につける(学校、家庭)
- ・身体の手操作性を高める(通級)



IV. まとめ(「」内は学級担任の感想を要約したもの)

今回の取り組みを通し、教室内で学級担任一人が抱え込むのではなく、対象児童の困難さに対して誰がどのように指導支援していくのかについて整理することができた。学級担任も、「通級でお願いするところがわかって見通しが持てた。」と障害のある児童を指導する上での負担感が軽減されたのではないかと思われる発言をしていた。関係教師の丁寧な取り組みにより、対象児童は現在、自力で階段の昇り降りが可能となり、保護者が学校に待機しなくても学校生活をスムーズに送れるようになった。また、本人もこれまで苦手としていた運動に対して意欲的になり、様々なスポーツ(通級指導教室で行う障害者スポーツなど)に積極的に参加している様子が見られるようになった。本実践では検証することができなかった課題を踏まえ、今後も研究を続けていきたい。

共同研究者：三嶋和也(千葉県立船橋夏見特別支援学校・教諭)